

図書館通信

『たとえ空が雲におおわれていても、太陽はその陰でいつも輝いている。』

【ロングフェロー】 アメリカの詩人 1807～1882

読書の秋です！新着図書がたくさん届いています。
附属図書館に是非お越しください！

[開館時間]

月曜～金曜日・・・9:00～17:00

土曜日 (10/10、11/28、12/12)・・・9:00～12:00



かがわ LOVE! 特集 第2弾
知ってる? 宇多津町 のあれこれ

前回好評だった郷土特集丸亀市に続き、今回はここ宇多津町の特集です。
「宇多津町のこのゆるキャラの名前は?」など、クイズ大会も開催中!
設置している資料で調べると必ず解けるようになっています。クイズに答えてくれた皆さんにはささやかですがプレゼントが?!是非チャレンジを!



お薦めの1冊

『スクラップ・アンド・ビルド』

羽田圭介 文芸春秋 2015年



専攻科(福祉専攻) 草薙真由美先生

今年は第153回芥川龍之介賞を又吉直樹さんがお笑い芸人で初めて、しかも初小説で受賞ということで、例年にくらべて盛り上がりましたね。芥川龍之介賞は、新聞・雑誌に発表された純文学短編・中編作品に贈呈される賞で、直木三十五賞と同時に制定されていて今年で80年になる由緒ある賞です。これらは、香川県出身で『父帰る』で有名な菊池寛が、自分が創刊した「文芸春秋」の発展に貢献した2人の友人の名を冠した賞を制定したものです。純文学とは芸術性・形式を重視した文学とされていて、代表的な作家として芥川龍之介、森鷗外、夏目漱石、島崎藤村、川端康成、太宰治、三島由紀夫、村上春樹などなどがあげられます。純文学は、大衆文学と比べて難しそうとか、面白くなさそうという声も聞こえますが、皆さんも読んだことがある有名な作家が沢山います。香川県に縁のある賞ですし、一度読んでみてはいかがですか？又吉さんの『火花』は様々なメディアで紹介されていますので、今回は、羽田圭介さんの『スクラップ・アンド・ビルド』を、紹介させていただきます。

この小説は、介護が必要になり娘と孫との同居を余儀なくされた87歳の祖父と28歳で無職の孫息子の物語が、自己都合退職後に、資格試験の勉強をしながら中途採用選考に落ち続けている孫息子の視点で書かれています。祖父は、長年住み慣れた長崎から埼玉の息子宅、そして東京の娘宅へと転居し孫息子と同居することになりましたが、「早う迎えに来てほしか」が口癖となっています。主人公は母親と協力して祖父の自立のために厳しく当たってきましたが、ある日祖父の願望である尊厳死をかなえてやろうと思いつきます。最新医学により「生かされている」祖父は、人間としての尊厳や人格を否定されていると感じたからです。その後は、出来るだけバリアを取り除き、動かなくてよい環境を整えていきます。しかし、実は……。主人公が祖父を理解し助けようとして努力することで、自分のスキルが上がっていった、というのは皆さんにも感じてもらえるのではないのでしょうか。

個人的には、介護現場の表現が、現実と合っていない偏見とも感じられる場面があり物言いをつけたいですが、短編で読みやすいと思います。ぜひ、手に取ってみてください。

子ども学科第 I 部 宮地和樹先生

内藤朝雄『いじめの社会理論』柏書房、2001年

前期の授業「教育原理」で Clica というアプリケーションを導入した。匿名のアンケート収集機能の特徴としており、学生はスマートフォンから Clica をダウンロードし、教員が設定したページを検索、登録する。教員は質問と最大5択までの回答を任意に作成でき、学生は適切だと思う回答ないしは自分の気持ちにもっともあてはまる選択肢に投票する。この結果がスクリーンとスマートフォンの画面にリアルタイムで反映される。学生が授業に能動的に参加するということのほかに、教員が聞くことをためられる、あるいは学生が答えづらい質問を気軽に設定できるという長所がある。



導入後、聞いてみたい質問がただちに思い浮かんだ。「あなたは今までの学校教育のなかで、いじめの当事者になったことはありますか?」である。教育学者として学生の反応、回答に興味を覚えるだけでなく、Clica を試行するには打ってつけの質問だ。

この質問を聞きたいがために、授業の一コマをいじめの解説に割り当てた。まず、いじめの定義、歴史、日本と海外の統計的情報を紹介し、いじめに関わっていると見なされる人物を階層的に分類(「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」の四つ)した。その上で Clica を使用し、「今までの学校教育のなかで、いずれかの立場でいじめを経験したことがあるか」という質問に対して、「はい」「いいえ」「分からない」の三択で学生に回答させた。

結果は、回答をしたほぼ全員の学生が、今までなんらかの立場でいじめを経験していた。どの立場か、という質問は行なわなかったため詳細は不明だが、少なくともいじめが学生の身近にあった／あることが分かった。とは言え、この結果は経験的に予測可能であろう。現象としてのいじめはわれわれの身近にある。ほとんどの人がいじめをなんらかの立場で経験してきたと言うだろう。しかしながら、こうした自明の現象であっても、日本のジャーナリズムや行政、アカデミックの世界で学校教育における問題としてのいじめが本格的に浮上するのは1980年代であり、比較的新しい。本書はこうした流れのなかであって、いじめの構造解明を目指した野心的な著作である。

「いじめは快感である」。この言明に内心身構える人もいるかもしれない。ひょっとすると彼はいじめを推奨しているのではないか、あるいは「いじめをしてはいけない」

という道徳的命題を宙づりにする規範的相対主義者なのではないか、はたまたただの天邪鬼か…。本書はこの命題を前提にし、いじめの構造を主に加害者の心理や振る舞いに着目して、社会学的-心理学的に解明しようとする。いじめが発生するまでの心理的過程、いじめがなぜ快感を与えるかについての原因、学校教育がいかにいじめに加担しているかについての分析等を、事例やインタビュー調査を豊富にまじえて論述しているの

で所々共感しながら読んでいけると思う。
ただし、著者は「いじめは快感である」という命題を是認するとはいえども、上記のいずれの立場にも組することはない。反対に、著者は正義の人、すなわち子どもそれぞれに彼らの権利を帰さんとする恒常的にして不断の意思を持っている人である。その意味では、著者のいじめに対するスタンスは、市民社会の法から遠く離れた学校教育の論理を持ち出す実践家、理論家よりもずっと厳しいものである。

したがって、本書は現象としてのいじめの構造を解明する側面と、問題としてのいじめに対する処方箋を与える側面の二面から構成されている。後者に関しては大幅な教育改革を求めるものであり、前者から後者がただちに導けるわけではない。とは言え、自分がどのような立場でいじめに関わっていたとしても、自らが経験した学校教育を反省的に捉えるには有益な本であると思う。



編集後記



今年の夏は猛暑で皆さん何かと大変だった事と思います。これからの季節は涼しくなりますが、夏の疲れが出てくる事もあるので、お身体を大切にしてください。

図書館では皆さんが快適に学習できるよういつも心掛けていたいと思います。わからない事などありましたら、いつでも気軽に職員にお声掛けください。

附属図書館